

2025年1月5日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教21「完成に向かう旅路」

申命記30：11～14、ヨハネ4：39～45

「二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた」（43節）ヨハネ福音書にとってガリラヤという土地は、救いが完成する地、よみがえりの新しい命を生きる世界として描かれているように思います。マタイによる福音書の最後にも、よみがえりのイエスさまがガリラヤで弟子たちと再会し、弟子たちを伝道に派遣される話があります。また次回読みます第4章46節以下は、ガリラヤのカナでイエスさまが病気で死にかかっていた少年を癒された話です。婚礼の奇跡に続いて、ここにもよみがえりの奇跡、新しい命が示されています。何れにしても、このガリラヤにイエスさまの旅の目的がある。よみがえりの命、天の祝宴に向かってイエスさまは旅をされるのです。それは、わたしたちの人生の旅路にも重なっています。イエスさまと出会い、真に礼拝すべきお方と出会うことでわたしたちの人生はそのように完成へと導かれる。サマリアの女性もサマリアの町の人々も、イエスさまと出会い、人生の完成、天の祝宴であるガリラヤへと導かれるのです。

そのことを踏まえて、与えられたテキストに向き合ってみましょう。まず注目していただきたいのは44節です。「イエスは、自ら『預言者は自分の故郷では敬われないものだ』とはっきり言われたことがある」これは他の福音書にも同じような表現がありまして、実際にイエスさまが生まれ故郷のナザレで伝道しておられると、人々から「この人は大工の息子ではないか」（マタイ13：54）と言われたところがあります。つまりイエスさまの言葉をまともに聞こうとしない人々の反応がそこにあります。預言者が故郷では敬われないというのは、一つのことわざのようなものと言われています。故郷ではどうしても親しみが出てしまうので尊敬されにくいのです。

ただここでイエスさまが、このようなことわざをお用いになられるのには、また別の理由があります。預言者とは、神さまの言葉を伝える者のことです。預言者が敬われないというのは、神さまの言葉が重んじられない。神さまの言葉を受け入れないということでしょう。このことはヨハネ福音書が最初から述べています。冒頭第1章「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」（1：11）とあります。それは最初の人間アダムとエバからすでに始まっています。アダムは、神さまとの約束を破りました。神さまの言葉を軽んじ、ないがしろにした。そこに罪があります。それ以降、人間は神さまの言葉を聞かず勝手に歩んできました。神さまの言葉を聞かないということは、人の言葉も聞けない、聞かないということです。それゆえ、神さまがいくら預言者を送っても、人は悔い改めず、その罪ゆえに自ら滅んでいくのです。これは人類の歴史を見れば明らかでして、すべての人間に当てはまることです。

加えて、多くの注解書が、ここにある「故郷」が具体的にどこを指すのか議論していますが、わたしは場所を特定する必要は全くないと思います。イエスさまは、お生まれになられたこの世全体を「故郷」としているのです。だからガリラヤでもサマリアでも、どこでも預言者は敬われない。イエスさまは「人の子には枕するところもない」（ルカ9：58）と言われました。クリスマスの物語でも宿屋はいっぱいでした。神さまの言葉は受け入れられない。むしろ排除される。この排除が、やがてイエスさまを十字架に追いやることになります。

サマリアの女性も、はじめはイエスさまを受け入れませんでした。イエスさまをばかにしてまともに取り合おうとしませんでした。けれどもイエスさまの方から「水を飲ませてください」と語りかけられ、イエスさまと対話を重ねる中で、女性の魂の渇きの原因が明らかにされました。それは、神さまときちんと出会っていない、まことの神さまを礼拝していないということです。そこに魂の渇きの原因があります。けれども礼拝すべきお方イエスさまと出会う。そしてイエスさまとの対話の中で、やがて女性は「この方がメシアかもしれない」と、イエスさまを信じることへ導かれていきました。

サマリアの町の人々もそうです。「そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された」（40節）ここで注目していただきたいのは、サマリア人たちはイエスさまに町に来て滞在するように願ひ、イエスさまはそれに応じて二日間サマリアの町に滞在し人々と一緒に過ごしたということです。そこには女性と同じような対話があったでしょう。食事をされたかもしれません。この経験がサマリアの人々を決定的に変えました。「更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた」（41節）のです。

ここにある「とどまる」「滞在する」（メノー）という言葉は、ヨハネ福音書では重要な意味を持つ言葉です。何よりクリスマスは、神さまの独り子イエスさまが、わたしたちのところ滞りされたことに他なりません。またこの言葉は、ヨハネ福音書第15章のぶどうの木の譬えの中でイエスさまが「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」（15：4）とおっしゃった「つながる」という言葉と同じ言葉です。イエスさまとつながる。それが、信仰を成り立たせるのです。「彼らは女に言った。『わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです』（42節）自分でイエスさまの言葉を聞いて救い主と出会う。ここに自立した信仰者の姿を見ます。それはイエスさまがとどまってくださったからです。神さまの言葉が近くにあるからです。だから信じるができる。そこに信仰が起こされます。

イエスさまにつながる、それは教会につながることに、教会にとどまることです。それは自分の努力で踏み止まるのではなくて、何よりもイエスさまが、ここにとどまってくださる。教会は「キリストのからだ」と呼ばれます。イエスさまのからだである教会につながることで信仰は養われ、維持されるのです。一人では信仰は完結できません。イエスさまがつながってくださる。そして信仰の友と一緒にいる。だからこそ信仰にふみとどまることができます。新しい年も教会につながり、共に祈り合い、助け合いながら信仰の歩みを続けましょう。

天の父よ。天の祝宴という完成を目指して歩み続ける者です。けれども自分一人ではこの信仰の旅を続けることはできません。何よりもイエスさまがとどまってくださる、つながってくださることで信仰は支えられます。また信仰の友との出会い、そのつながりがわたしたちを励まします。どうぞこの年も共につながりを感じつつ、励ましあって歩いていくことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。